令和６年度　日本大学櫻丘高等学校　自己評価票

〔本校の目指す学校像〕

日本大学の教育理念である「自主創造」の精神を基に，「自ら学び」，「自ら考え」，「自ら道をひらく」能力を持つ生徒の育成を目標とする。そのためには「生徒ファースト」の視点に立ち，個々の教員が一人一人の生徒と向き合いながら，様々な情報を共有し，全教職員が協力して生徒指導に当たる必要がある。これにより個々の生徒が学習活動や課外活動に生き生きと取り組み，基礎的な知識・技能ばかりでなく，思考力・判断力・表現力，あらゆることに主体的・協働的に取り組むことのできる力を備えた生徒を育成していく。本校は 70 有余年の歴史を持つが，先人たちが培ってきた良き伝統の上に，現代社会におけるニーズに応える新しい教育を取り込む「不易流行」の精神を持って，魅力のある，選ばれる学校を目指していく。

〔本校の特徴〕

本校では，総合進学（Ｇ）クラス，特別進学（Ｓ）クラスの２コースを設定し，日本大学を中心に個々の生徒の志望に対応した教育の充実と進学指導体制の確立を目指しており，それぞれのコースに応じたきめ細やかなホームルーム指導や生徒指導で自主性を育み，社会性も育成していることが特徴である。

令和元年度より現代の社会の変化に対して身につけるべき学力の３要素，すなわち「基礎的な知識・技能」を活用するための「思考力・判断力・表現力」そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養うために「櫻イノベーション」を立ち上げ，より一層充実した教育活動を展開している。その具体的な施策は，①グローバル教育×ダイバーシティ，②体験型高大連携教育×サイエンスリテラシー，③アクティブ・ラーニング×ＤＸ，④クリティカルシンキング×プレゼンテーションリテラシー，⑤ルーブリック評価×ＰＤＣＡの５つの柱から成っている。①～④の様々な教育施策を実施した成果を⑤「ＳＡＫＵＲＡルーブリック」によって学期ごとに生徒自身で評価させ，21 のテーマごとの伸長の度合いを可視化し，次の「ＳＡＫＵＲＡルーブリック」に目標を定めさせることで，ＰＤＣＡサイクルを回しながら学力の３要素の確立を図っていく。

〔令和６年度の重点目標〕

１　「グローバル教育×ダイバーシティ」

留学制度を更に充実させ，ニュージーランドでの１年間の単位認定留学や３か月の中期留学，イギリスでの２週間の短期語学研修を進めるとともに，令和６年度より修学旅行を海外(シンガポール・マレーシア)へと変更し，グローバル教育を全生徒へ展開する。また，アメリカの高校との「Ｕ．Ｓ．デュアル・ディプロマ・プログラム」は，令和４年度１期生が卒業し，アメリカの大学に入学した。現在７名が参加しており，オンラインとｅラーニングで学習を続けている。通常の授業においては，ネイティブ教員による英会話授業（クラス３分割体制）や放課後英会話カフェの実施により，英語４技能の修得を進める。新学習指導要領の目玉である「探究的な学習」では，１年生全クラスが英字新聞の作成を行う。

２　「体験型高大連携教育×サイエンスリテラシー」

日本大学のスケールメリットを最大限に生かすとともに，文理学部に隣接する併設校であるメリットを活用して，キャンパスツアー，単位認定講座の受講，研究室訪問など単なる進学指導にとどまらない進路観育成を中心に取り組むことにより，優秀な生徒を日本大学に進学させる。今後は探究学習の中心的な役割として高大連携教育が重要となる。日本大学付属校のメリットを最大限に活用し，16 学部と積極的に連携し，優秀かつ意欲的な生徒を日本大学へ進学させるよう取り組む。

３　「ルーブリック評価×ＰＤＣＡ」

スクール・ポリシーを達成するため，５つの価値観と４つのスキルに関し 21 のテーマを設けて達成度を５段階で可視化したルーブリック評価を入学時と各学年で年間に３回実施する。どのような生徒を育成したいのか，生徒は何ができるようになるのかということを明確にし，目的意識を持って学校生活に取り組むことができるように進めていく。

〔令和６年度の自己点検・評価結果〕

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
教育活動	新学習指導要領を踏まえた上での授業・評価の改善	令和４年度に改訂された新学習指導要領での学びは，令和６年度より全学年で実施している。各教科の入念な準備やこれまでの２年間の検証の下で，「生きる力」を育むきめ細やかな内容のシラバスを作成した。 また，シラバスに基づき，各教科でアクティブ・ラーニングを取り入れた充実した授業を展開している。 探究学習では，学年ごとのシラバスに沿って，主体的な学びとしてアクティブ・ラーニングを実践している。３年生は探究学習の集大成として，３学期に自分たちの学習内容についてプレゼンを行っている。どのクラスもしっかりと取り組んでおり，主体的で協働的な学びが浸透している。 観点別評価では，３観点（知識・技能，思考・判断・表現，主体的に学習に取り組む態度）の割合や評価方法等について，全教科統一の方法で実施し，生徒・保護者に学期ごとの評価を周知している。これにより，点数だけでなく多角的な学習評価がなされるのと併せて，生徒も自身の学習姿勢を確認することができ，学びの改善にも役立っている。	A	各教科のシラバスを検証し，「生きる力」を育むカリキュラム編成についてブラッシュアップしていく。 探究学習についても，内容・時間配分などを検証してより良いものにしていく。 観点別評価については，生徒の学びへの姿勢が適切に評価できるように，各教科での打合せ等をしっかり行っていく。
	生徒による授業評価アンケート結果に基づく授業改善	教員は，生徒による授業評価アンケート結果を受け取ると同時に振り返りをまとめており，速やかに授業改善に反映できるようになっている。また，通年で教員相互の授業見学を認めており，常に授業改善が可能な環境作りにも努めている。	A	授業での指導方法等について，教員が自ら振り返り改善できる機会として，令和７年度以降も生徒による授業評価アンケートを活用していく。
	高大接続改革への対応	高大接続改革について，学力の３要素を踏まえて本校では，スクール・ポリシーを明確にし，新学習指導要領に基づいたシラバスを作成して主体的で協働的な学びを進めている。また，大学入試については，多様化する入試方法に対応できるよう，外部業者とも連携しながら講習や英検資格取得等の講座の受講を推進している。さらに，大学付属校の特徴を生かして，法学部・文理学部・経済学部・商学部・生物資源科学部と高大連携教育を実施し，学部訪問，日本大学の教員	A	令和６年度の取組について，多面的・総合的に評価し，「学力の３要素（1.知識・技能、2.思考力・判断力・表現力、3.主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）」を育成する教育活動を行っていく。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
		による出張講義や文理学部に設立された「次世代社会研究センター（ＲＩＮＧＳ）」での探究活動への参加など，様々な学びに触れる機会を提供している。本校独自の取組として，定期考査前に放課後学習チューター制度を実施している。これは文理学部の教員志望の学生による定期考査前の質問対応であるが，生徒は身近な学生に勉強をサポートしてもらうため，大学の学生や施設に親しみを持つことができている。これらの取組により，多くの生徒が日本大学に進学した。あわせて，他大学についても一般選抜だけでなく，多様な選抜方法を利用しており，進学実績が上がっている。		
	スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針，教育課程の編成及び実施に関する方針及び入学者の受け入れに関する方針）の策定及び公表	本校のスクール・ポリシーは，「スクール・ミッション」，「グラデュエーション・ポリシー」，「カリキュラム・ポリシー」及び「アドミッション・ポリシー」の４つで構成し，本校ホームページで公表している。	A	スクール・ポリシーについて，学校長をはじめ学校の方針をしっかりと検討し，全教職員で共有していきたい。 また，本校の魅力を伝えられるように，適切に公表していきたい。
	グローバル教育の更なる推進	令和６年度は，１・２年生対象のイギリス語学研修 67 名，ニュージーランド中期留学 14 名，ニュージーランド長期留学２名の生徒が参加した。これらの参加人数は新型コロナウイルス感染症が５類への移行後最大となっている。令和５年度に引き続き，「U.S.デュアル・ディプロマ・プログラム」は好調で，現在１～３年生で９名の参加者がおり，アメリカの大学への進学を目指している。 ２年生の修学旅行はシンガポール・マレーシアを訪れ，異文化に触れる機会を提供した。	A	本校の櫻イノベーション（教育の特長）の柱となっている「グローバル教育×ダイバーシティ」に基づき，令和７年度も語学教育に力を注いでいく。 留学や修学旅行のみならず，どの教科においても日々の学習にグローバルな視点を取り入れ，多様性を受け入れる人材を育てていきたい。
	教育の質の向上及び働き方改革に向けた行事予定の見直し	教職員研修を年４回実施し，様々なテーマについて学んだ。また，働き方改革の一環として，保護者による生徒の欠席等の連絡を Classi（コミュニケーションアプリ）で行うことにより，教員の電話対応軽減を図った。さらに，教員の業務の多様化，修学旅行の日程等を踏まえ，各行事の実施時期に偏りがないように検討した。	A	令和６年度の教職員研修は，新教育課程入試，教育現場における生成ＡＩの活用，教員の仕事への姿勢等のテーマで研修したため，令和７年度も引き続き様々なテーマで研修する。 働き方改革を踏まえての行事予定の見直しについても，教員からの意見を取り入れながら協議していきたい。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
学校生活への配慮	いじめ防止のための取組	個人面談及び「学校生活アンケート」による生徒の理解・掌握を進め，ささいなサインを見逃さないこと，相談しやすい環境作りを実践した。 日本大学作成のリーフレット「日本大学は，「いじめ」を絶対に許しません！」を配布し，いじめの概念やいじめは絶対に許されないことであるという点を全生徒，保護者及び教職員に周知した。	B	日本大学作成のリーフレット「日本大学は,「いじめ」を絶対に許しません！」を配布し，いじめの概念やいじめは絶対に許されないことを全生徒，保護者及び教職員に周知する。 個人面談及び「学校生活アンケート」により，生徒への理解を進め，ささいなサインを見逃さない，相談しやすい環境作りを行う。
	社会生活上のルールやマナーに対する意識の向上と問題への早期対応	登校時に挨拶の励行や服装指導，交通マナーの立哨指導を行った。また，下校時にも校門前の四差路における立哨指導を行った。 学期ごとに挨拶の励行やマナーの厳守，思いやりのある言動をとる等の生活目標を掲げ，社会生活において必要不可欠な規範意識を育て，個人のモラル向上に努めた。 外部業者によるネットパトロールに加え，学校リスクマネジメント推進機構や本校スクールカウンセラーと連携するなど，専門家と相談しながら問題の早期対応・早期解決を行った。	B	登下校時に立哨指導を行う。 ＨＲにおいて登下校時のマナーの厳守，挨拶の励行及び服装指導等を行い，生徒への社会生活上のルールやマナーの意識付けを行う。 外部の専門家と相談しながら問題の早期対応・早期解決を行う。
課外活動	文化祭・体育大会の充実	文化祭は，合唱コンクールの再開及び防犯面を強化し，企画を実施することができた。 体育大会は，種目の変更やはちまき配布などを行い，場所・内容共に充実したものになった。	B	文化祭については防犯面の強化が今後更に必要となってくるのでチケット制にするなどどのような対策ができるかを委員会で検討していく。 体育大会は団対抗がとても好評だったので，更に団ごとの応援団の結成や種目の見直しなど満足感がより得られる内容にしていく。
	生徒会行事の実施時期，内容等の検討	体育大会の２日後に芸術鑑賞会があり，気が緩んでしてしまう様子があった。	B	令和７年度の体育大会を 10 月実施，芸術鑑賞会を 11 月実施で予約ができたので，引き続きこの日程で開催できるように施設側・劇団側と交渉を進めていく。
進路指導	日本大学への進学者数増加に向けた取組	７月の面談時に 12 学部より担当者を招いて進学相談会を開催した。相談件数は 247 件に上った。 ４月，７月，９月に３年生を対象に進路説明会を実施し，学校推薦型選抜（付属高等学校等）について説明を行った。また，進路説明会の動画を本校ホームページにもアップし，保護者にも視聴を促した。 １年生に対して，４月に文理学部のキャンパスツアーを，７月に首都圏学部への学	A	相談件数を更に伸ばせるよう，事前のアナウンスを丁寧に行う。 講演内容を見直し，より生徒が主体的に考えられるようにする。 実施後の生徒アンケート等を可能な限り学部にフィードバックし，学部との連携を図る。

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
		部訪問を実施し，日本大学への進学意欲を高めることができた。		
	キャリア教育の充実	１年生は10月に，２年生は７月に，日本大学の各学部から延べ40名の教員を招き出張講義を実施した。事後アンケートによると，「満足」，「やや満足」と回答した生徒は80%に上り，学問研究の一助となった。 ２年生11月の進路説明会では，卒業生による進路講演を実施した。	A	当日の教室担当の教員への説明をより丁寧に行い，スムーズに運営できるようにする。 進路講演に協力してくれる優秀な卒業生を早い時期に確保できるようにする。
	高大連携教育の推進	前期後期合わせて，延べ71名の生徒が法学部・文理学部・経済学部・商学部・生物資源科学部の講義に参加した。 文理学部次世代研究センター（ＲＩＮＧＳ）との合同イベントとして，産官学連携による探究プログラムに７名の生徒が参加した。 ９月に１年生全員を対象に文理学部生講演会を実施した。事後アンケートによると，70%近くの生徒が「満足」，「やや満足」と回答しており，進路観を広げることができた。 ９月に実施した文理学部体験授業では，182名の生徒が参加した。	B	参加者を増やせるよう，生徒，保護者への周知を丁寧に行う。 早めに募集できるよう，ＲＩＮＧＳに働き掛ける。 時間が長く，集中力が維持できない生徒も見られたため，講演時間や登壇する学生を絞る。 参加者を増やせるよう，生徒，保護者への周知を丁寧に行う。
保健衛生	**健康診断の実施及び感染症の予防**	４月に健康診断を実施した。 ６月に熱中症予防対策，９月に新型コロナウイルス感染症・インフルエンザ予防対策の更新（新型コロナウイルスについて，簡易検査キットだけでなかく，「発症日の確定」を含めて必ず医師の判断を要することとした）を行い，更に11月にその他の感染症への対策も周知徹底を図った。	A	令和７年１月に業者との打合せを開始し，４月22日（火）に健康診断日が決定した。令和７年度の始業式に健康調査票の回収を行う。 熱中症予防の注意喚起については５月以降に，感染症予防の注意喚起と手続についての確認は１学期と２学期にそれぞれ行う。
	特別支援体制の強化	特別支援に関して，守秘義務に留意しつつ生徒の情報共有と個別対応を周知徹底した。 １年生対象の生徒相談資料調査を行い，体と心の悩みを早期に見いだし，面談等に活用した。	A	各学年よりヒアリングとミーティングを通じて，支援や配慮の必要な生徒についての情報を得る。 ７・12・３月：ミーティングを開催する。 ５月：生徒相談資料調査を実施する。 通年：合理的配慮について，教職員の共通理解を促進する。
図書	**図書室の利便性向上と利用促進**	図書館開室日程，新着図書，おすすめ図書などの情報発信や，蔵書検索アプリの案内をClassiで適時配信した。 写真部生徒作品をギャラリー的に展示す	B	感染症対策による利用制限が解かれて１年以上が経過し，利用者数・貸出し冊数の回復傾向は一段落したと見られる。ただし，対前年比がおおむね横ばいとなっていることを踏まえ，従来どおりの安定した利用環境を維持しつつ，ニーズの適切な把握を行い，様々なタイプの生徒が図書や読書に関心を持てる企

評価項目	取組目標（Plan）	取組状況（Do）	達成状況（Check）	令和７年度の取組方策（Action）
		るなど，様々な生徒にとって図書室が身近なものとなるよう企画を実施した。		画を行っていくことで，ダイバーシティに対応する。
	蔵書の精選	司書による選書のほかに図書委員生徒による選書や生徒からのリクエスト対応も行い，より生徒に寄り添った蔵書構成を目指した。また上級学年を中心に要望の多い学習参考書の充実にも配慮した。	A	グローバル教育やサイエンスリテラシーの充実に資する図書･資料の収集を図りつつ，サブカルチャー的な図書･資料についても柔軟に収集することで生徒が足を運びやすい蔵書構成も意識する。
広報	**入試学校説明会の運営方法及び内容に関する検討**	令和６年度は，入試学校説明会において，英国語学研修参加者・ＮＺ長期留学参加者に体験談を話してもらった。参加者アンケートでは，８割を超える来校者が体験談に満足する意見を記載してくれており，効果の程がうかがえた。また，待機時間に生徒インタビュー動画等も流すことで，本校の様々なプログラムを知っていただけるため，令和７年度以降も，様々なプログラム参加者に体験談を話してもらえる機会を積極的に設定していきたい。	B	定期考査や修学旅行との兼ね合いから，説明会の誘導などに生徒を動員することはできなかったが，現在も，生徒の様子を見てみたいとの声を多数いただいているので，生徒会等とタイアップしながら，更なるブラッシュアップを模索していこうと考えている。
	ＨＰ活用の強化	令和６年度も，週２回程度の新着情報の更新は実現することができた。また，バナーの設置やホームページ全体の更新も年内にある程度進めることができた。また，トップページにおいて，大きなコンテンツとして設置していた SAKURA Pictures を SAKURA Movie に変更し，動画視聴数の増加につなげることができた。	B	在校生の声や部活動情報など，定期的な更新を必要とする部分もあるので，令和７年度以降もホームページを適宜確認し，最新情報への更新を随時行っていく。
管理運営	**海外修学旅行の推進**	令和６年度修学旅行を海外（シンガポール・マレーシア）で実施した。久々の海外での実施であったが，学年での入念な打合せ・準備もあり大きなトラブルもなく終了することができた。生徒にとって満足度が高いものとなった。	A	実施内容や班編成については再考の余地があるため，令和６年度の実施状況を踏まえて内容の精査，適正な金額等の意見等を参考にして決定していく。
	施設・設備の老朽化対策	安全衛生委員会の委員によって校内施設の巡視を行い，毎月開催される安全衛生委員会で施設の破損や瑕疵の状況を報告し，その改善を図った。	A	状況によっては改善に長期間かかるものや改めて予算化する必要があるものがあり，全てを逐一改善することは難しいが，「危機管理マニュアル」に従って生徒の安全を第一に対応していく。

〔令和６年度の自己点検・評価結果概要〕

令和６年度は，修学旅行等の校外に出る学校行事や特に海外修学旅行（シンガポール・マレーシア）を 12 月に実施し，「コロナ禍前」と同様の形態で実施できた。その結果，授業，課外活動，学校行事，高大連携イベントも全て通常どおり全うすることができた１年であった。

３年生の進学状況については，日本大学への進学者は学校推薦型選抜（付属高等学校等）基礎学力選抜方式，付属特別選抜方式を合わせて 344 名（３学年全体の 69.4%）となっており，令和５年度は 367 名（同 69.6%）であった。基礎学力選抜方式での進学者は 268 名である。なお，他大学の学校推薦型選抜の状況は，12 月の段階で 63 名（同 12.7%），その多くは指定校推薦であった。これからＳクラスを中心として一般選抜が始まるので，難関私大等他大学への進学者数は増える見込みである。

櫻イノベーションの進捗状況については，①グローバル教育×ダイバーシティにおいて，イギリス語学研修，ニュージーランド留学（中期・長期）を実施し国際交流を推進できた。また，②体験型高大連携教育×サイエンスリテラシーにおいて，日本大学各学部から教員を招いての出張講義に加えて，文理学部情報科学科と連携して１年生を対象に特別講義を実施し，生徒の進路観育成に役立たせることができた。さらに，③ルーブリック評価×ＰＤＣＡにおいては，ルーブリック評価を学期ごとの３回に増やして，生徒の教育活動への振り返りや目標設定をより明確化するとともに，「学力の３要素」の達成状況を可視化できるよう工夫することができた。

〔令和７年度の重点目標〕

１　「グローバル教育×ダイバーシティ」

留学制度を更に充実させ，ニュージーランドでの１年間の単位認定留学や３か月の中期留学，イギリスでの２週間の短期語学研修を進めるとともに，令和６年度より実施した海外修学旅行(シンガポール・マレーシア)の内容等を見直し，グローバル教育を全生徒へ展開する。通常の授業においては，ネイティブ教員による英会話授業（クラス３分割体制）や放課後英会話カフェの実施により，英語４技能の修得を進める。新学習指導要領の目玉である「探究的な学習」では，１年生全クラスで英字新聞の作成を行う。

２　「体験型高大連携教育×サイエンスリテラシー」

日本大学のスケールメリットを最大限に生かすとともに，文理学部に隣接する併設校であるメリット活用して，キャンパスツアー，単位認定講座の受講，研究室訪問等単なる進学指導にとどまらない進路観育成を中心に取り組むことにより，優秀な生徒を日本大学に進学させる。今後は探究学習の中心的な役割として高大連携教育が重要となる。日本大学付属校のメリットを最大限に活用し，16 学部と積極的に連携し，優秀かつ意欲的な生徒を日本大学へ進学させるよう取り組む。

３　「ルーブリック評価×ＰＤＣＡ」

スクール・ポリシーを達成するため，５つの価値観と４つのスキルに関し 21 のテーマを設けて達成度を５段階で可視化したルーブリック評価を入学時と各学年で年間に３回実施する。どのような生徒を育成したいのか，生徒は何ができるようになるのかということを明確にし，目的意識を持って学校生活に取り組むことができるように進めていく。

以　上